

乳 児 の 発 達

— 講 座 心 理 学 (1) —

細 部 国 明

第1節 発達段階

発達是一般に連続的であるが、心身の諸特性は時期によって発達速度が異なる。一般の身体発達は①「頭部から尾部へ (cephalo-caudal direction)」進む方向と、②「中心部から末梢部へ (proximo-distal direction)」進む方向がある (図161-1)。従って、心身の全体像も各時期によって異なってくる (図161-2)。子どもは単に大人の縮図ではない。生から死までを幾つかの段階に区

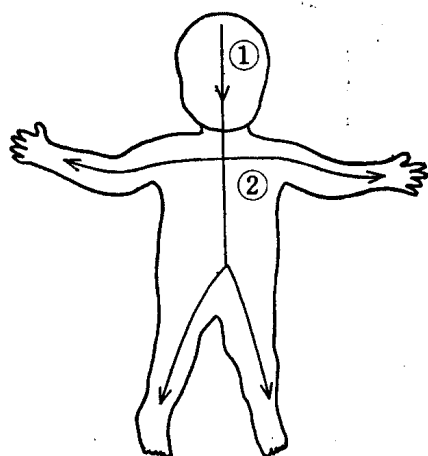


図 161-1 身体・運動の発達の方向
(Vincent, E.L. & Martin,
P.C. 1961)

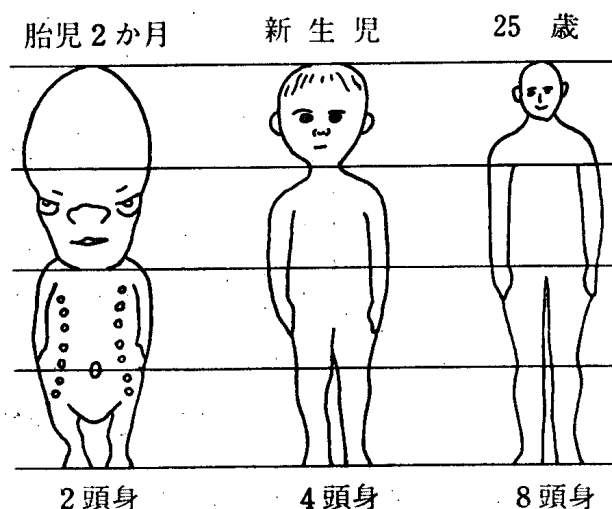


図 161-2 身体の割合の変化
(Stratz, C.H. 1922)

分する試みが多くの人によってなされてきた。段階づけの基準を大きく3つに分けると次のようになる。

1. 身体的発達による区分

歯牙、骨格、第二次性徴 (secondary sex character) などとも考えられたが、ドイツの生理学者シュトラッツ¹⁾は、身長と体重の増加が交互に表われることに注目して、それらを伸長期・充実期と名づけ数段階に区分した (表163)。

2. 精神的発達による区分

ビューラー²⁾の主観化・客観化の時期に基づいて、牛島義友³⁾は図164のような区分をした。またピアジェは思考の発達を基準にし、フロイトはリビドーの発達を基準にし、エリクソンは葛藤解決の発達を基準にして、発達の区分をしている。

3. 社会的慣習や制度に基づく便宜的区分

我が国では古くは元服15歳、年寄42歳、隠居61歳などといった区別もあった⁴⁾。

1) Stratz, C. H. 森徳治訳 子供のからだ 創元社 1952。

2) Bühler, Ch., Kindheit u. Jugend 3 Aufl. 1931.

3) 牛島義友 青年の心理 巖松堂 昭24

4) 一般に中年を頂点とする社会があるが、社会の進歩ということを考えはじめた近

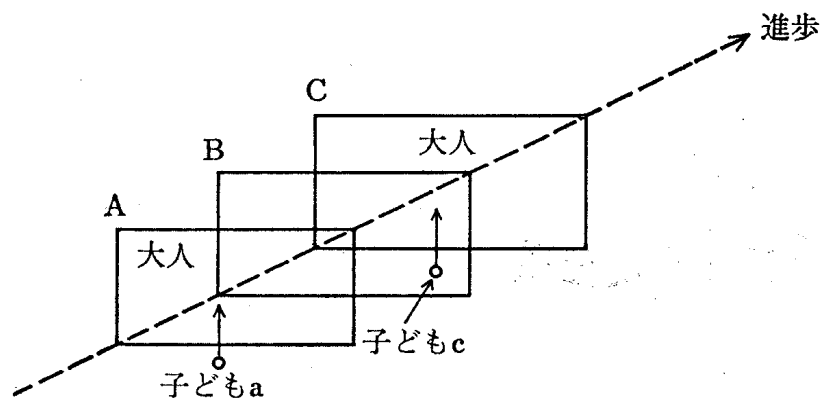


図 162 近代社会の構造

代人にとっては、子どもが一度大人の社会に入ったからといって安心していただけるわけではない。子どもaが社会Aの大人となったとしても、社会Aが進歩して社会Bへと変化してゆくとき、彼がそのまましていると、大人として認められない存在となってくる (河合隼雄 大人になることのむずかしさ 岩波書店 1984)

表 163 発達段階

	0	1	3	6	12	15	18	22	35	才
〔社会的慣習〕	乳児期	幼児期 前期 後期 (保育園・幼稚園)	児童期 (小学)	青年期 前期 後期 前期 中期 後期 (中学) (高校) (大学)	成人期	壮年期	老人期			
〔身体的発達〕	(乳児期) (0~1)	(中性児童期) (2~7才)	(両性児童期) (8~15才)	(成熟期) (16~20才)						
シュトラッ		第1充実期 (2~4)	第2充実期 (8~11)	第1伸長期 (5~7)	第2伸長期 (12~15)					
〔精神的発達〕										
ピアジェ (思考)	感覚運動 的思考	前操作的思考 (表象的思考)	操作的思考 (論理的思考)							
		前概念 的思考 (2~	直感的 思考 (4~	具体的 操作 (6・7~	形式的 操作 (11・12~					
フロイト (リビドー)	口唇期	肛門期	生殖期 初期	潜伏期	生殖期後期					
エリクソン (葛藤解決)			(8段階・他書参照)							

現実の学校制度も考慮に入れた表163の区分は实际的であり、現在よく用いられている。

第2節 胎内環境

上に出生後の発達段階について述べたが、個体の発達はそれ以前の卵子と精子との結合、つまり受精の瞬間から始まっている。科学的研究が発達していなかった時代には、子どもの心身の障害の多くは遺伝的要因によるとされていた。しかし、医学などの進歩により受精後の母胎内における環境、つまり胎内環境が胎児の発達に影響を与えることがわかってきた。ワーカニー, J. G. ら¹⁾は、

哺乳類を中心とする胎生動物での実験から、発育障害の発生条件を示している（図165-1）。発達上好ましくない問題は、母胎内環境をできるだけ望ましい状態に保つことによって避け得るものもある。

更に、妊娠以前の問題も存在することを忘れてはならない。例えば、40歳以後の出産では妊娠中の異常やダウン症候群（Down's syndrome）の発生率が高くなって来る（図165-2）。

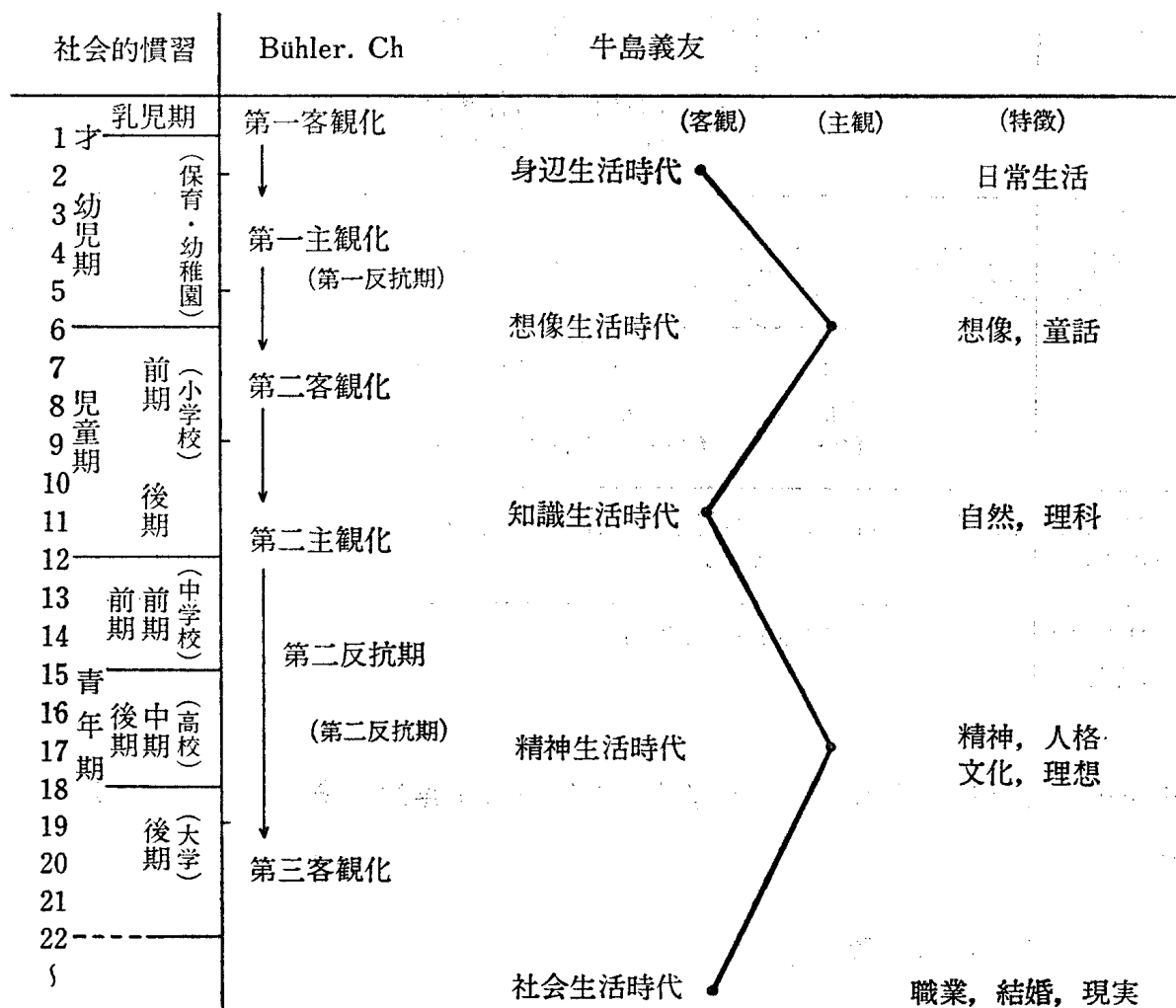


図 164²⁾ 発達段階—主客の交替—

- 1) Warkany, J. G. 1945 Some factors in the etiology of congenital malformations. American Journal of Mental Deficiency, 50, 231-241. 栗田威彦 1956 先天性奇形に関する研究 高津忠夫・中村兼次(編) 小児科最近の進歩 医歯薬出版
- 2) 図164 は 須藤泰雄 教育心理学 新光閣書店 1964 による。

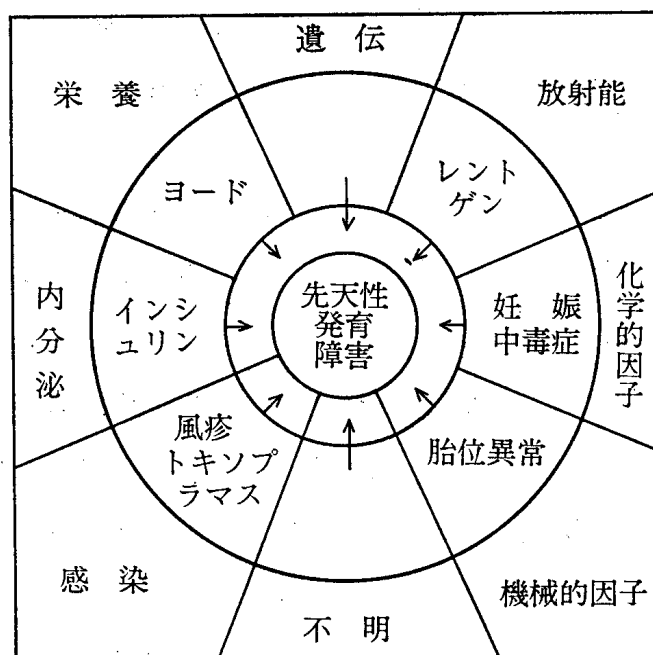


図 165-1 先天性発育障害の発生条件
(ワーカニー, J. G., 1945)

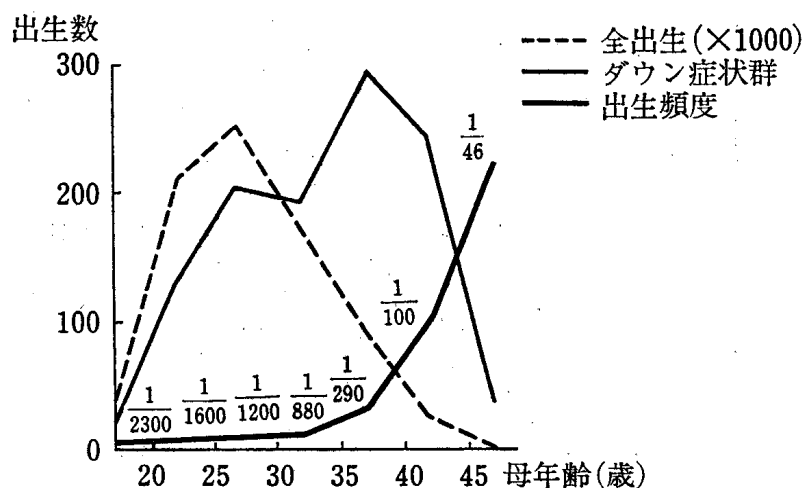


図 165-2 ダウン症状群出生頻度 (Collmann & Stoller, 1962)

母胎内における胎児の発達段階は次の3つに分けられる。

- (1) 卵体期 (ovum) 受精卵が子宮壁に着床するまでの約2週間。
- (2) 胚芽期 (embryo) 胎児と母体の連絡を受けもつ胎盤がつくられる時期で、第2週後半から第10週まで。外胚葉 (ectoderm) からは中枢神経系・感

覚器官等，中胚葉 (mesoderm) からは筋骨・結合組織等，内胚葉(entoderm) からは消化器・呼吸器・肝臓等がつくられる。胚芽期の後半は神経系の形成が盛んである。

(3) 胎児期 (fetus) 受精後第10週以後から第40週の誕生まで。一応形でできた内臓諸器官や筋骨，神経系などが胎外環境に適応できるところまで分化し発達する時期である。

妊娠後の障害の原因は，妊娠中，分娩時，分娩後の3期に分けられる。妊娠3か月前後に母体が風疹にかかると，聾・心臓奇形・精神薄弱児などになる率が相対的に高くなる (図166)。妊娠初期のビールス性疾患，糖尿病のように長期にわたる疾病や薬剤使用，強度なX線照射などは好ましくない。サリドマイド系睡眠薬などの母体侵入によるアザラン状奇形の発生は1960年頃から西独を中心に世界的問題となった。

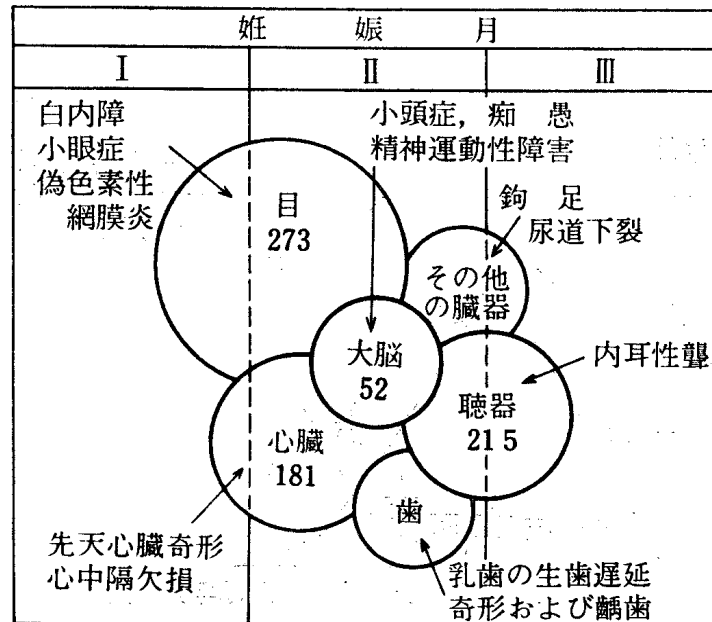


図 166 風疹感染時期 (妊娠月) と奇形の種類 (Fanconi ら, 1948)

現在は，妊娠8か月以後から出生後1週間を周産期 (perinatale period) とも呼び，母子の健康管理を主な課題とする周産期医学が発達してきている。分娩時も含めて，この時期に発生する障害も意外に多い。強度の難産，機械による分娩などが，ある種の脳性麻痺など心身の障害の原因になることもある。

精神病院に入院する女性の約3～10%が、出産を機会に発病しているといわれる。夫との人間関係上の問題・経済や住居などの問題・妊娠中の強い不安定な心理状態から、産褥期に産褥性精神病になり、これが育児ノイローゼに発展する場合が多い。

妊婦の精神状態は一般には次のような経路で、胎児に影響する。種々の問題→妊婦の不安定な心理状態の発生→自律神経系を介して妊婦のホルモン分泌に変化→ある種の化学物質の発生→胎盤を通して胎児の循環系に影響を与える。

通常は、妊娠・出産は精巧な生理的過程であり、適度な栄養のバランスがあれば、母体も胎児も出産に十分耐えるだけの生理的機構を備えている。

第3節 乳児の発声活動

誕生後の発達の様子をおもに話しことばの発達過程から見てゆく¹⁾。

(1) 産声・泣き声

陣痛ごとに胎盤から胎児に送られていた血液の運行は不活発となる。それは胎児への酸素の供給が不活発になることを意味する。分娩後のへその緒の結紮により、胎児の体内には炭酸ガスが多くなり、これが呼吸中枢を刺激する。酸素欠乏状態が続くと脳神経細胞は壊死を起こしやすい。胎児が自分の肺で吸ったこの世の空気を、反射的に吐き出す時の音が「ンギャー」という産声である。産声は子どもが自力で肺呼吸ができたことの証明であり、まさに命をかけた声である、と同時に誕生後初めて発する音声である。精神分析的には母と分離させられることに対するこの世への恨みの第一声を意味する、という見方もある。

産声に続く一連の泣き声の変化、例えば声の大きさ・高さ・音色・リズム等の変化は呼吸機能や喉頭などの生理的発達、更には、知覚したものや心身の状態を伝達する機能の発達の目印にもなる。

(2) 喃語 (babbling)

生後1～2か月すると、泣き声とは異なったもう1つの声、「アー」とか

1) 細部国明 乳児期のことば(横山正幸編 乳幼児の言語指導 北大路書房 1979)

「ウー」というような声が出てくる。この種の発声を喃語と呼ぶ。成人の精神生活に重要な働きをする「ことば」は、喃語から発達してきたものである。喃語は、まだことばを話さない乳児の心を知る手がかりとしても意味がある。

6か月頃から「アーアー」といった反復性喃語が発せられるのが普通である。ところが聾児においては、初めの喃語発声は健聴児と同じだが、6か月以降になると発声活動は急速に衰え、反復性喃語へと発達していかないことをレネバーグ¹⁾は見出している。この点から喃語の発達には発声器官のみならず、聴覚も重要な役割を果たしていることがわかる。

環境の違いが乳児前期の発声活動に与える影響を示しているブロードベック²⁾の観察を図168に示す。6か月未満の乳児においても、家庭で育てられた子どもの方が喃語発声の種類と頻度で優っていた。当時と現代の施設環境とでは違いがあるであろうが、施設での乳児保育が盛んになってきた今、参考にす

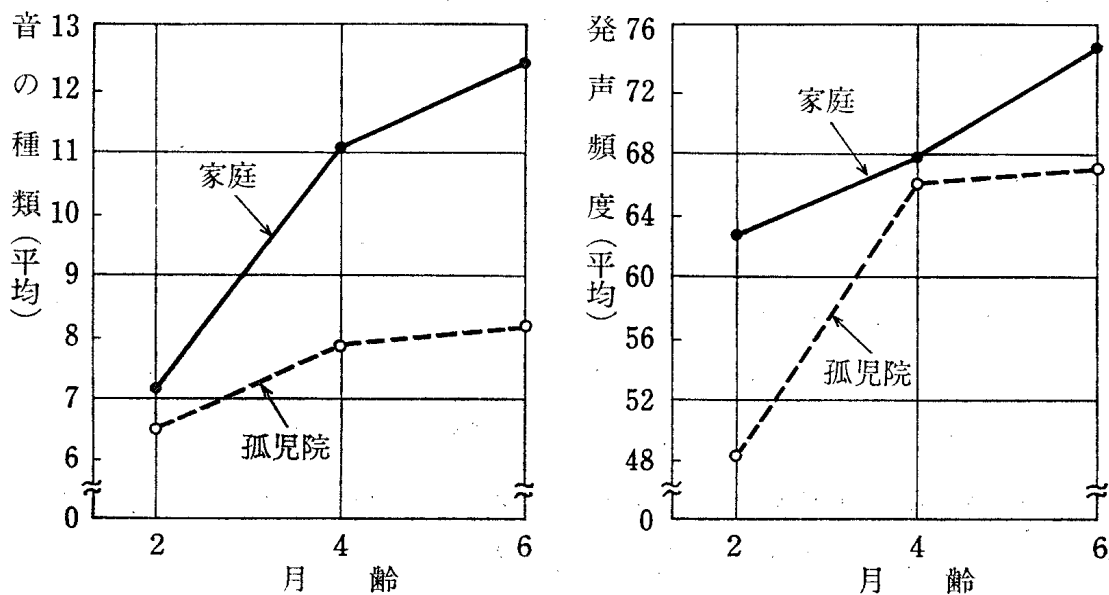


図 168 家庭と施設の乳児の発声の頻度平均と音の種類平均
(ブロードベック, A. J. とアーウィン, O. C., 1946)

- 1) Lenneberg, E. H. 1964 Speech as a motor skill with special reference to nonaphasic disorders. In U. Bellugi & R. W. Brown (Eds.), *The acquisition of Language. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 29, 115-127.
- 2) Brodbeck, A. J. & Irwin, O. C. 1964 The speech behavior of infants without families. *Child Development*, 17, 145-156.

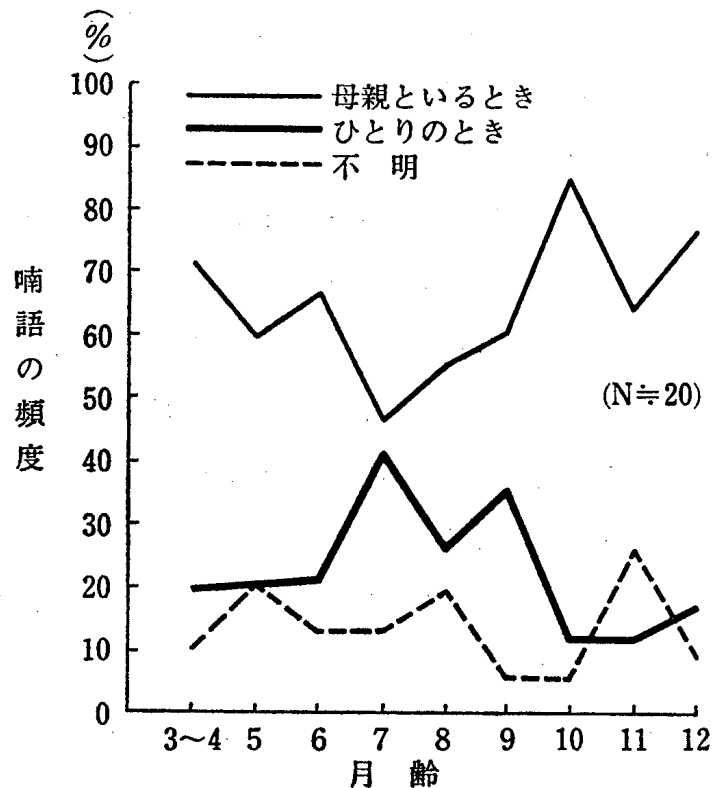


図 169 ひとりのときと母親がいるときの喃語の頻度 (村井, 1961)

べきものを含んでいる。

村井¹⁾は0;3から1歳まで各月齢ほぼ20名の乳児の喃語を観察した。喃語頻度は1人遊びの時よりも母親といるときの方が多い、という結果を得ている(図169)。母親がいる場面での喃語は必ずしも母親に向かって発声されたものではなく、1人遊びの時の喃語と同じ機能を持つものも多かった。村井はそれを自閉的喃語と呼び、人々と関係を持っている時の喃語を社会的喃語と呼んでいる。

- (3) 音声模倣 }
 意味の模倣 } → 初語

生後7~8か月頃になると、相手の発音を1つ1つ模倣できるわけではないが、周囲の音やことばの抑揚やリズム等全体の感じを自分が発声できる喃語を使って模倣するようになってくる。これを音声模倣と呼ぶ。例えば、「ターっち！」には「パーパ！」といった具合である。そしていったん模倣して獲得できた音声を、周囲の状況とは無関係に喃語化して楽しそうに遊んでいる。これ

1) 村井潤一 1961 乳児期の音声発達 哲学研究 41, 270~292.

は音声遊び (vocal play) と呼ばれる。このような音声模倣は強制されて発声するのではなく、母の胸に抱かれている時のように乳児にとって快適な雰囲気の中で、全く自発的に行なわれるのが普通である。

9～10か月以降、音声模倣の様子に変化が生じてくる。例えば、音声遊びに使われていた「パーパ！」という喃語を発している時をよく観察すると、父親を見つけた時とか父親を見送る時とか、向かと父親と関係がある状況で、「パーパ！」という発声をするが多くなってくる。即ち①特定の喃語発声—と②特定の状況や対象—との結びつきが徐々に固定化されてくる。

そして、子どもが自発的に、特定の状況や対象を意図して、特定の発音を使用するようになった時、その発声は最初のことば、すなわち初語と呼ばれる。初語が成立する時期は、ある時点というよりも、そのことばが種々の状況において適切に用いられることが多くなってくる時間的長さをもった初語期として考えるのが適当である。その時期は個人差が大きいが普通1歳前後である。

初語は音声面では喃語としてよく使われていた音声である。中島¹⁾はアメリカと日本の子どもの音声を、生後2年間追跡し、1;0歳までは音素上に差異はほとんど見られなかったことを報告している。喃語は万国共通語とも言われる。初語は意味の面では、子どもの欲求や生活に密着したものが多い。例えばママ (母親)、マンマ (食物)、ネンネ (寝る)、ブーブ (水) などである。

(4) 発声以外の活動との関連

乳児の発声活動は心身の他の活動と密接に関連している。その一端を理解するために乳児の動作の発達との関連について考察しよう。

①共鳴動作：3～4か月児は母親が乳児の前で口や手を開閉すると、それに共鳴するかのように自分の口をもぐもぐさせたり、手を開いたり閉じたりするような共鳴動作を示す。②到達—把握行動：6～7か月になると、こんどはその開閉する対象などの方向に手を伸ばして、その対象を手で捕まえようとする到達—把握行動が多くなってくる。③指示行動：8か月以後になると「ウウッ

1) 中島誠也 1960 乳幼児の言語発達(3) 日本理学会第24回大会論文集, 365.

一」などと言いながら、手で届かない対象をも指で示す指示行動が可能になる。自分の身体の一部である手を伸ばしても届けないものを指で指し示すことが可能になったことは、話題を宇宙にまで拡大できる心が乳児に芽ばえていることを意味する。動物には指示行動がない。「狼に育てられた子」¹⁾も指示行動を示さなかったが、自閉症 (autism) も同様の傾向がある。

さて、相手の動作への共鳴は、相手の音声を模倣する下準備となり、対象を指で示すことは対象をことばで示す一步手前の現象でもある。このように日常ありふれた動作の発達も、言語獲得に至る過程で重要な役割を担っている。

逆に母親がことばと並行して身振りや表情を使って表現してやることは、乳児がことばを理解する際に助けとなる。身振りや表情なども非言語として意味を伝達する機能を有しており、行為言語、身体言語などの用語も使われる。

乳児のことばの発達は、聴覚、身体活動、視覚その他種々の精神的機能など全体的な発達と関連しており、ことばだけを分離して発達させようとするのは望ましいことではない。食事の時や、服を着せたり、入浴の時など実際の生活経験に合わせて、喃語返し、話しかけ等の応答をしてやることが大切である。

(5) 使用語彙と理解語彙

初語は形式的には一語であるが、内容的には1つの文章と同じ役割を果たしている。例えば子どもが発する「マンマ (食物)」という一語が、「マンマが欲しい」であったり、時には「マンマが存在する」という意味であったりする。このような表現形式を一語文 (one word sentence) という。一語文の時期は約半年間続く。いろいろな場面でことばを積極的に使用するようになるが、その間語彙はさほど多くなならない (表171-1)。

2歳頃から2語文へと発達していく。乳児が話す文章の長さを調べたのが表171-2である。3歳頃までに文章が急に長くなるが、それ以後は余り長くならない、ちなみに、小学校低学年は7語、成人は7.7語位の談話文である²⁾。

人間は使用できることばより多くのことばを理解している。まだ、ことばを

1) Gessel, A. 1941, Wolf child and human child, New York: Harper & Brothers.

2) 辰野千寿 幼児期の心理と教育 新光閣書店, 1967, p. 62.

表 172-1 使用語彙の発達

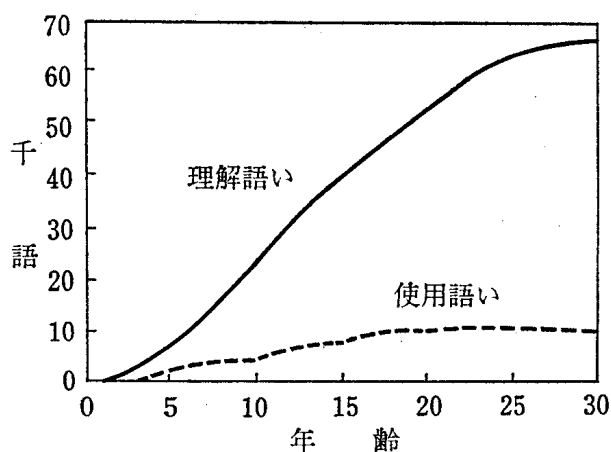
年齢	日 本	ア メ リ カ (smith)
1	5	2
1:6	40	22
2	260	272
3	800	896
4	1,600	1,540
5	2,000	2,072
6	2,400	2,569

表 172-2 文の長さの発達

年齢	語 数
1	1.4
2	2.8
3	4.4
4	4.5
5	5.0
6	4.6

(牛島義友・森脇要)

話さない6か月位の乳児でも自分の名前は理解している。子どもがあまりしゃべらないからといって、その子に不利になるようなことを周りの大人が話した場合、その意味が子どもに理解されていることが多い。理解語彙と使用語彙の差は、その後も大きくなっていくのが普通である(図172-3)。

図 172-3 語いの発達 (Morgan)¹⁾

第4節 ホスピタリズム

ホスピタリズム (hospitalism) は子どもが家庭から離れて病院, 乳児院,

1) Morgan, J. J. B. Child psychology. 1942 (大平勝馬編 青年心理学 日本文化科学者, 昭37.)

施設などで長期にわたって養育された場合に生ずる心身の発達の障害や遅滞の総称である。これが大きな問題になってきた背景には世界大戦がある。第2次世界大戦（1939—1945年）直前、ドイツにおいて孤児収容施設児と売春婦である実母の手元で育てられた子どもの発達差が研究され、後者の方が発達をより損わずにいたことがわかった。世界各国の研究は世界保健機関（WHO）の提案によりボウルビー¹⁾によって1951年にまとめられた。ホスピタリズムの概要を理解するには、縦断的研究法（longitudinal method）を用いた下記のゴールドファーブラ²⁾の研究を見るだけで充分であろう。

おもに生後9か月頃までに母親と離別した子どもを、①母親の元から直接里子になった子どもと、②その後3年間の施設生活後に里子になった子どもに分けて、両グループの精神発達を比較した。両グループは遺伝的にできるだけ類似した子どもが選ばれ、里家の性質も等しくするようにされた。特に、里母の教育程度、職業、精神状態の点においては、施設群の方が多少とも勝っているほどであった。最も詳しく調査された15組の子ども達の検査時における年齢は10～14歳であった。著しい有意差を示した項目を表174-1、表174-2に示す。両グループに対してはこの外にロールシャッハ・テストも実施しているが、その結果はここでは省略する。

施設児に関する反応で、一般に未経験の保母達はその意味を見誤るものに次のような離別反応がある。母子関係が親密で順調に発達していた2～3歳の子が、母と離別しなければならない時に情緒的变化が生じる。泣く、かんしゃく、非従順、遺尿、無感動、人見知り等の行動である。未経験の保母は、これは甘やかされてだだをこねるのだと、このような諸行動を示す家庭児に対して批判的である。これに対して、施設で育てられてきた子や一度も母性的人物に育てられた経験のない子ども達は、身近かな人との離別によってこのような諸行動を示さないので高く評価されがちである。しかし、これは後者が離別の悲しみ

1) Bowlby, J., Mental Care and Mental Health. World Health Organization 1951（黒田実郎訳 乳幼児の精神衛生 岩崎学術出版社 1967）

2) Goldfarb, 1943 J., exp. Educ. 12, 106, etc.

表 174-1 生後3年間を施設で過した幼児と施設経験のない
幼児（統制群）との差異（ゴールドファーブ）¹⁾

検査した機能	テストおよび 評価方法	結果の表し方	結 果	
			施設群	統制群
知 能	ウェクスラー	平均知能指数	72.2	95.4
概念形成能力	ウィーグル	平均得点	2.4	6.8
	ビゴツキー	平均得点	0.5	4.7
読 書 力	標準テスト	平均得点	5.1	6.8
算 術	標準テスト	平均得点	4.7	6.7
社会的成熟度	ケース・ワーカーによって完成されたバインランド・スケール	平均社会指数	79.0	98.8
規則を守る能力	欲求不満の実験	人 数	3	12
規則を破った場合の罪意識	欲求不満の実験	人 数	2	11
対人関係能力	ケース・ワーカーの評価	正常な人間関係の可能な人数	2	15
言 語		普通の能力を示す人数	3	14
幼 児 数(合計)			15	15

註：いずれもPは.01以下である。

表 174-2 生後3年間を施設で過した幼児と、施設経験のない幼児
（統制群）の問題点（ゴールドファーブ）

問 題	評 価 者	結果の表わし方	結 果	
			施設群	統制群
友人間の不人気	ケース・ワーカー	問題を示す幼児数	6	1
愛情の飢え	〃	〃	9	2
恐 怖	〃	〃	8	1
不安定、行動過剰	〃	〃	9	1
注意力不足	〃	〃	10	0
学業成績不良	〃	〃	15	1
人 数(合計)			15	15

註：第1項目のPは0.5から0.2の間、その他のPは0.1以下

1) Goldfarb らの研究結果は Bowlby の前掲書に収められている。

をおさえているというよりも、むしろ感情生活はすでに破壊されているので、上述のような感情的変化を示さないのである。5～6歳児の健常児の場合は2～3歳よりは耐性ができてくる。

現在、施設の養護条件などの改善により身体的ホスピタリズムは改善の方向にある。しかし、心理的ホスピタリズムの問題は、施設そのもの、集団養護そのものによって起るものではない。施設や集団養護における母性的養護 (maternal care) の欠如や生活不安から来ていた疑いが濃厚である。従ってホスピタリズムは母親との相互交渉の障害として、つまり母性喪失 (maternal deprivation) の概念で捉えることが多くなっている。

これは現代の一般家庭で育っても、乳児と相互交渉関係にある母親を欠き家庭的環境を失なった子どもは、maternal deprivation の状態であれば、同様の心理的障害が起こり得ることを意味する。

第5節 愛着形成

1) 乳児の一番の関心

"人間の一番の関心は人間である" ともいわれる。このことばは生まれたばかりの乳児にも当てはまるであろうか。ファンツ¹⁾ は注視時間の観点から乳児の関心を調べた。6種類の直径約15cmの円い図形を、青色の地にいろいろな順序で提示した。各図形に対する最初の注視時間を計った結果が図176である。

この実験や他の一連の実験から、人の顔に対する乳児が示す注視時間は注目に値する。乳児は生まれつき傾人性を持っている。乳児にとって最大の刺激は人間なのである。しかも、人間の顔の中でも、声を伴った正面向きの顔に対して、乳児が最も微笑みかける²⁾ のである。

2) 愛着を形成しようとする生得的欲求

1) Fantz, R. L., The Origin of Form Perception, Rosenblith, J. F. & Allinsmith, W. (Eds), The Causes of Behavior: Reading in Child Development and Educational Psychology, Allyn and Bacon, 1962.

2) Spitz, P. A. The First Year of Life. International University Press. 1965.

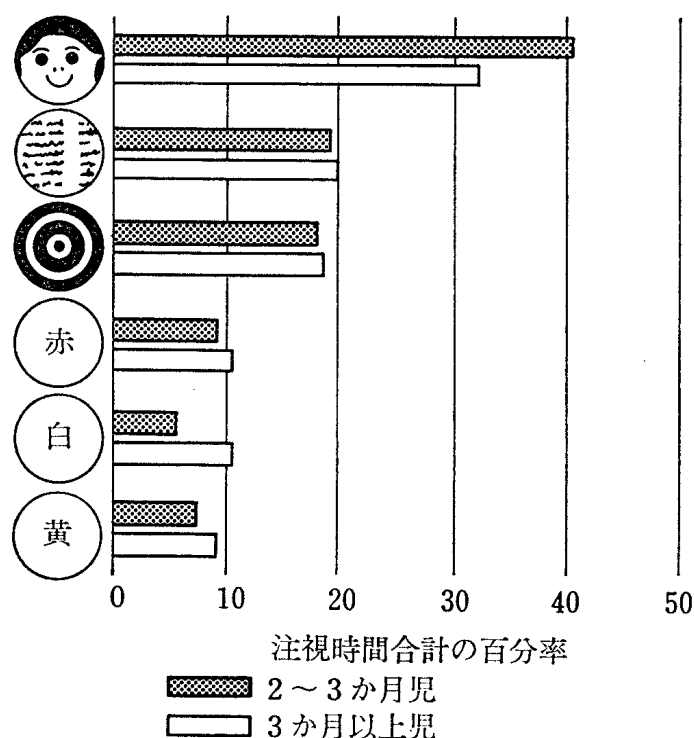


図 176 図形に対する乳児の注視時間 (%) (Fantz, 1961)

出生直後からみられる母と子のきずなは愛着 (attachment) といわれ、あらゆる種類の動物において認められる生得的な基本的欲求である。まだ飛べなくて口を開けている子ツバメに、せっせと餌を運んでくる親ツバメ、このような光景を見たことがあるだろう。この愛着と呼ばれる親と子のきずなといえども、いつでもつくられるわけではない。端的にはローレンツ¹⁾の刻印づけ (imprinting) が示しているように、愛着が形成できる臨界期 (critical period) があり、その中に最適期 (optimal period) がある。

通常、乳児が養育者に対して示す愛着行動は2種類に分けられる。1つはまだ動けない乳児が養育者や人間の注意を引き付ける機能を持つ注視、泣き、微笑、喃語発声など、どちらかといえば受身的な行動で、シグナル行動と呼ばれる。もう1つは、しがみつき、ひざにのぼる、後追いなど能動的な行動で、接近行動と呼ばれる。

1) Lorenz, K. Z. 1957. Companionship in bird life. In C. H. Schiller (Ed.), *Instinctive behavior*. New York: International University Press.

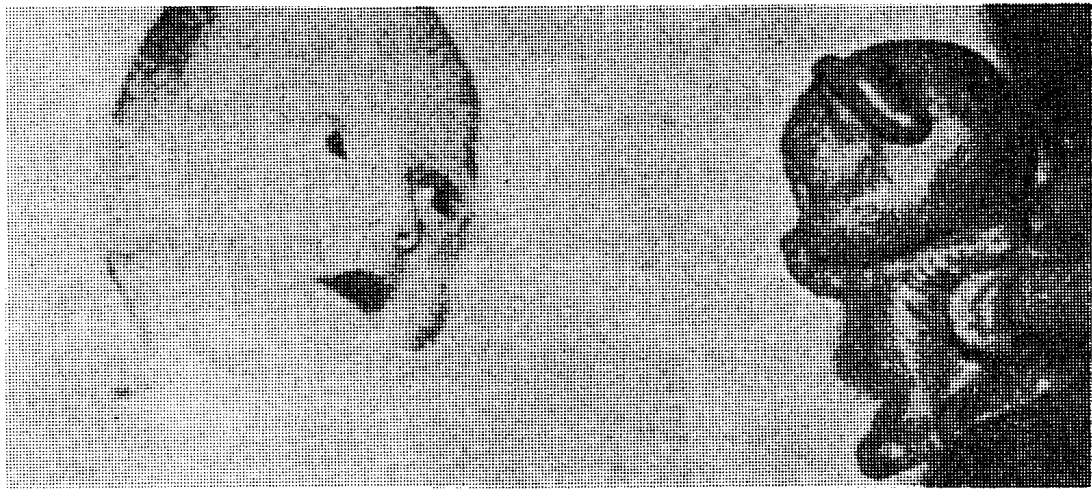


図 177-1 注視・追視 (イリングワース, R. S.)

シャファーら¹⁾が観察した乳児の愛着行動を図177-2に示す。この図から次のことがわかる。①生まれたばかりの頃、即ち乳児前期は人間であれば無差別に誰に対してでも、注視や微笑や喃語発声などの愛着行動を示す。②しかし、生後6～9か月頃からは、誰に対してでも愛着行動を示すことは減少してきて、特定の個人に対する愛着を形成し始める。子どもによっては人見知り(stranger

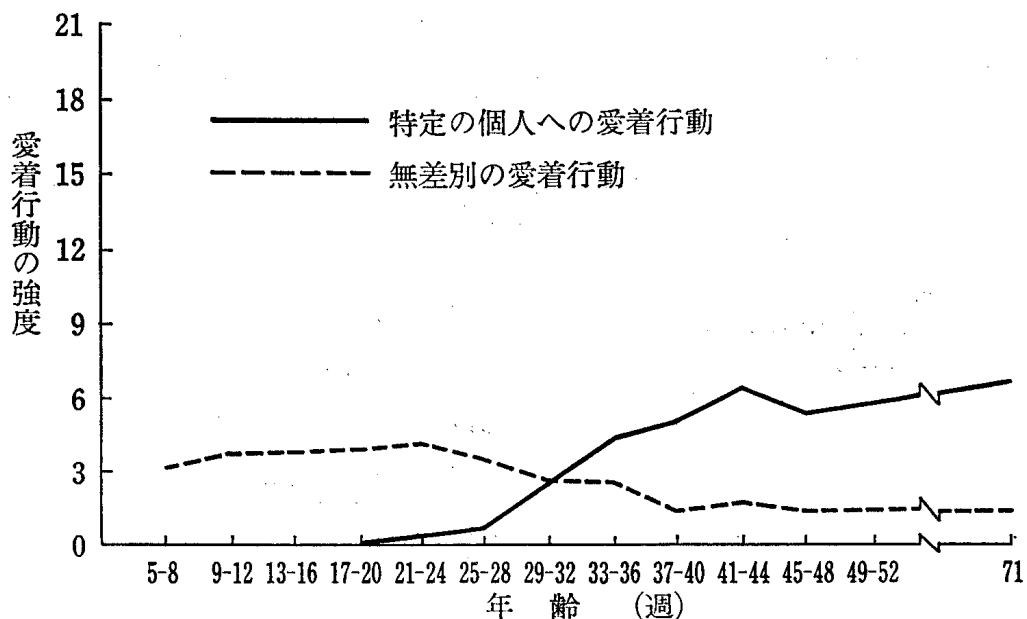


図 177-2 愛着行動の発達過程 (Schaffer & Emerson, 1964)

1) Schaffer, H. R. and Emerson, P. E. 1964, Monogr. Soc. Res. Child Developm., 29, 3.

anxiety) を始めるのもこの頃である。

母親が子どもを抱っこして母乳を与えていれば、母親が乳児の特定の愛着対象者になるのが普通である。それでは、母親が離乳時期を早めたら乳児の愛着エネルギーはどこへ行ってしまうのであろうか？ その答えは、都市と農村における授乳形態と子どもの反応を調べた奥平¹⁾の研究結果に示唆されている。母乳期間を短かくするほど、物への愛着が増していく（図178-(a)）。

乳児にとって愛着の対象が、母親や他の養育者など人間の場合と、毛布など「物」の場合との決定的な違いは、前者とは相互交渉関係が成立するが、後者とはそのような関係が成立しないということである。前者の場合、愛着対象者の人間的要素の取り入れ（introjection）が行なわれる。しかし後者の場合はそれが行なわれないので、いろいろな社会的学習の獲得に疑問を投げ掛けることになる。

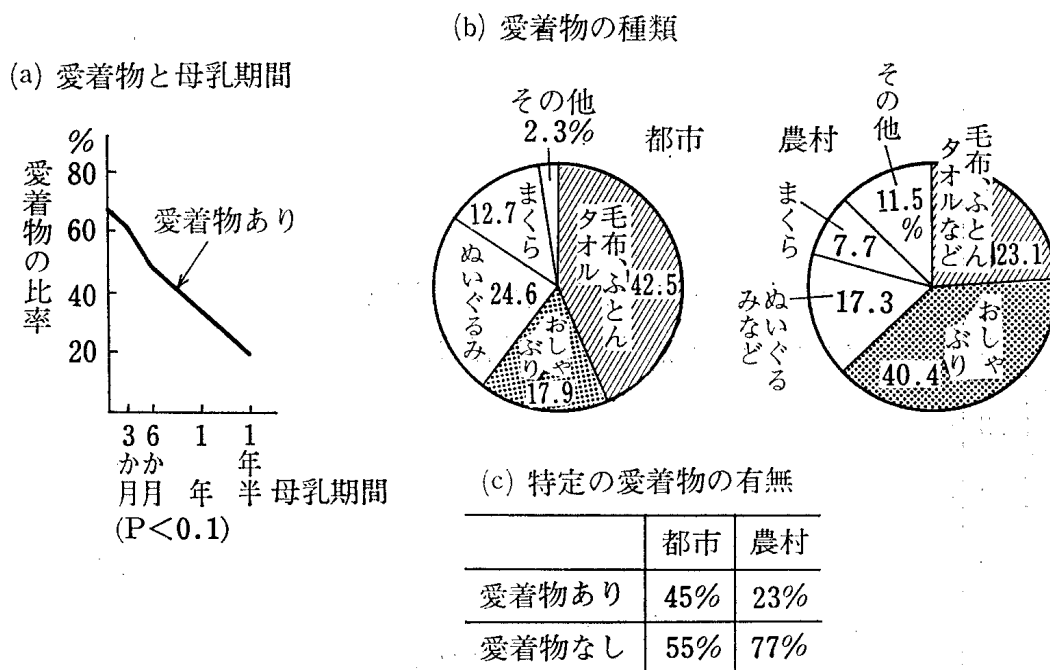


図 178 都市と農村における授乳形態と子供の反応（奥平，1955）

3) 愛着の成立基準

乳児期最大の発達課題（developmental task）は、相互交渉関係の存在す

1) 奥平洋子他 乳幼児心理学 東京書籍 昭和53年, p. 117.

る養育者への愛着形成である。エインスワース¹⁾は愛着が形成されているかどうかの目印に、愛着の日常的な成立基準として次の12項目をあげた。

①他人に抱かれると泣き、母親に抱かれると泣きやむ（差別的泣き）。②他の人よりも母親に対してより多く微笑する（差別的微笑）。③母親に対してより頻繁に喃語を発する（差別的発声）。④離れていても母親を注視する（視覚—運動的定位）。⑤母親が視野から消えると泣く。⑥這えるようになると母親の後を追う（後追い）。⑦母親のひざによじのぼり、母親の顔や髪や衣服で遊ぶ。⑧母親のひざに顔をうずめる。⑨母親にしっかりしがみつく（しがみつぎ）。⑩腕をあげて母親に抱いてもらおうとする。⑪母親が戻ってきた時、喜びの表情で手を叩いて母親を歓迎する。⑫母親から離れて探索に出かけるが、すぐに母親のところに戻る（安全基地からの探索）。

保育者がそばに居なかったり、忙し過ぎたり、テレビを見てたりする時、乳児が示す愛着のサイン特に乳児前期のシグナル行動の方は見逃されやすくなり、乳児はタイミングよい相互交渉関係の応答や経験を得られない。これは乳児のすることが周囲の人々によって無視されることを意味する。耐えがたいときはその不安や恥などが抑圧され、心的外傷 (psychic trauma) として乳児の無意識に残り、後にコンプレックスを形成すると考えられる。

4) 愛着対象（安全基地）から自立への足がかりへ

ハーロウ²⁾の実験を見た方が理解しやすい。猿が布母に愛着を形成した効果は、太鼓を叩きながら前進する玩具の熊を檻の中に入れた時などに、はっきり表われた。即ち愛着を形成した猿は布母にしがみつくことにより、恐怖 (fear) を鎮め安定するのである。そして再びこの外敵への探索行動 (exploratory behavior) が開始された。それに対して、針金母で育てられ、愛着対象を得られなかった猿は、オロオロするばかりで恐怖は消えず、自立的に探索する行動は見られなかった。

1) Ainsworth, M. 1963, The development of infant-mother interaction among the Ganda. In Foss, B.M. (Ed.), *Determinants of infant behavior II*. New York; John Wiley & Sons Inc. 67-104.

2) Harlow は猿を使って一連の実験を行なっている (1953, 1958, 1959, 1965)

先ず安心して帰れる基地ができてこそ、思い切って未知の世界へ旅立つことができたのである。物理的な例では、バネは初めに大地の方に縮められた方が、より遠くへ舞い上がることができるのに類似している。フロイト流に言うならば、愛着形成が充たされないと、そのエネルギーはいつまでも乳児期（口唇期）に固着して、次のステップへ進みにくくなるのである。エリクソンの発達段階に対応させるならば、愛着形成ができてこそ、人生における第一段階の基本的信頼が身に付くのである。この信頼を学習するかしないかはその後に見われてくる自発性獲得への葛藤、自我同一性獲得への葛藤と連鎖的に後の人生へ関連してくる。

人間の最大の課題を自我の形成におくならば、乳児期の愛着形成が不十分だと、自我の形成に大切な第一反抗期（自我発達と社会化の葛藤）、心理的離乳（psychological weaning）、諸領域における真の自立へと展開させにくくなるのである（図180参照）。

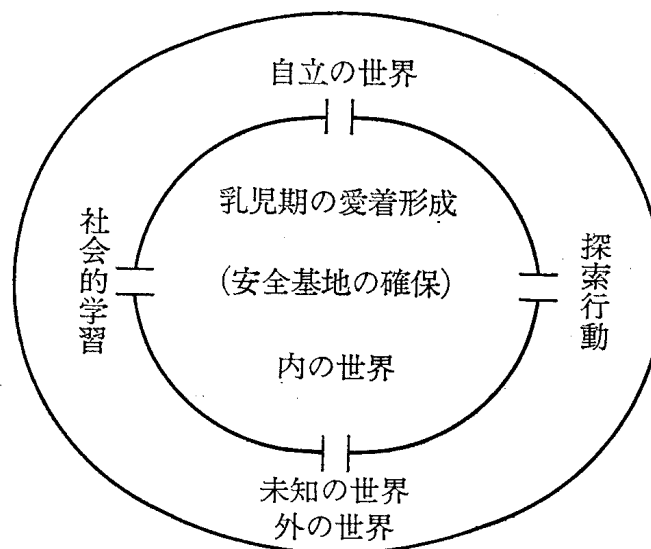


図 180 愛着から自立へ

第6節 授乳行動

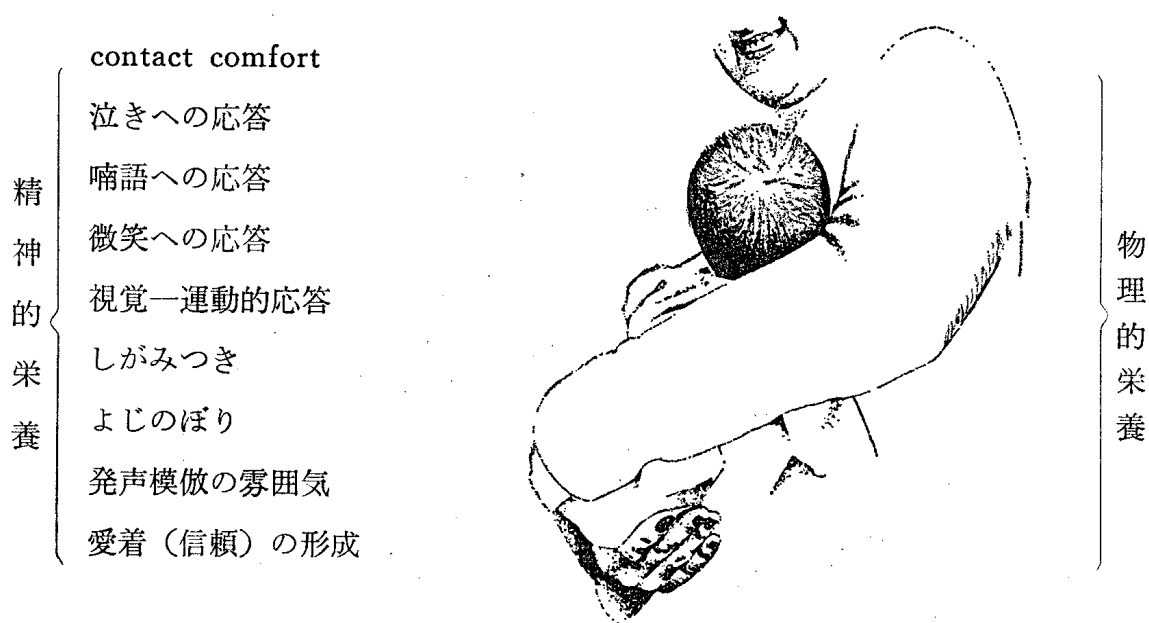
乳児が人間社会に生きていくには、先ず1つには身体が生きていかねばならない。もう1つは精神が生きていかねばならない。前者の中核は食欲の充足である。後者の中核は同種間の愛着形成欲求の充足である。



図 181 「狼に育てられた子」1920年インドで発見された姉カマラ8歳と妹アマラ1歳は、狼の洞穴の中でしていたように、重なり合って眠った。(Gessel, A 著生月雅子訳 家政教育社 1974年より)

同種間の愛着形成欲求には大きくは2つの側面がある。1つはハーロウの布母猿の実験や野生児の睡眠時の状態(図 181)などから明らかになる接触要因である。これを *contact comfort* と呼んでおこう。他方はホスピタリズム研究などから徐々に明らかになりつつある母性的養護 (*maternal care*)¹⁾ の側面である。乳児が生きるために必須の物理的栄養と精神的栄養 (*contact comfort* と *maternal care*) の両方を同時に含んでいるものは何であろうか。それは余りにも日常的であるが、母親の胸からの直接授乳である。

1) ここでいう母性的 (*maternal*) とは必ずしも現実の女性を意味しない。

図 182 授乳行動¹⁾

物理的栄養は哺乳ビンから、精神的栄養は母親からとなると、生存に基本的な二大欲求を充たす対象は分離してしまう。そのことは諸領域の発達がまだ未分化な乳児の存在を分離ないし混乱させる可能性がある。乳児はその全存在をかけて母親にアタッチメントできなくなる。それに対して、母親の胸からの直接授乳の場合は、乳児は自分の物理的存在と精神的存在を含む全存在をかけて、母親にアタッチメントしていくことができるのである。母親の授乳行為がいかにより乳児の愛着形成に重要な役割を果たしているかは、先の奥平の研究からもうかがえる。離乳が早すぎるほど母親への愛着が他の物へと分割させられていた。

同種間の愛着欲求を充足させる最適期は子どもがまだ歩けない乳児期である。母乳の物理的栄養は他の物で代替できても、授乳行動における精神的栄養の中核である愛着形成の代替は今のところ見つかっていない。それどころかその代替が発見される可能性はますます低くなってきている。乳児への物理的栄養と精神的栄養とを同時に含んでいる母親による授乳行動は、いかに優れた教育的行動であるかということである。

1) 図：日本リーダーズダイジェスト社「暮らしの医学百科」1984